

大学生の Twitter 使用と心理的幸福感の関係

井上 陽路

近年、ソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）が急速に普及し、大学生にとって欠かせない存在である。SNS が社会に浸透する以前は、CMC（Computer-Mediated Communication）がインターネットを介する主なコミュニケーション手段であった。五十嵐（2002）は、社会的スキルが対面による社会的ネットワークを介して孤独感を低減させるが、CMC には同様の効果はなかったことを明らかにした。これについて、五十嵐（2002）は、CMC は時間や距離の制約がなく利便性を持つが、身体的な近接性を欠くため、対面による社会的ネットワークのような強い紐帯が形成できなかったことと関連すると述べている。

現在、既知・未知の他者とも繋がることのできる Twitter では、相手との親密度によって異なる社会的ネットワークを形成し、その相手から異なるソーシャルサポートを受けられるだろう。また、Twitter では多くの情報から信憑性のあるものを見極める必要があり、見知らぬ他者と新たな人間関係を構築する上で一般的信頼性が必要となってくる。そこで本研究では、①対面と Twitter による社会的ネットワーク、それぞれから得られたサポートが相手との親密度によって異なるのか、②これらは心理的幸福感とどう関係するのかについて、一般的信頼性と社会的スキルとの関係も含めて明らかにすることを目的とする。

上記の目的を達成するために、関東地域の大学に在籍する学部生を対象に 2019 年 5 月中旬～6 月下旬の間に調査を行った。調査票では、分析対象者の個人特性、一般的信頼性、メディアと Twitter の使用状況（1 日の Twitter 使用時間、いいね・返信/投稿/閲覧頻度等）、Twitter・対面における社会的ネットワーク（直近 3 ヶ月以内で交流を行った相手の性別・関係・親密度・直接会う頻度等最大 10 人をリストアップ）、ソーシャルサポートの種類（情報提供・困ったときに助けてくれる・自分の存在を認めてくれる等）、社会的スキルと心理的幸福感を尋ねた。回答に不備等があったものを除き、304 人を対象として分析を行った。

分析をした結果、以下のことを明らかにした。①一般的信頼性と社会的スキルが心理的幸福感に直接ポジティブな効果があった。②一般的信頼性の低い人は Twitter を多用して非常に親しい人と社会的ネットワークを形成し、そこからソーシャルサポートを獲得することが出来た。しかし心理的幸福感への向上効果にはつながらなかった。また、同様の効果は対面にはみられなかった。これらの結果から、①社会的スキルと一般的信頼性の育成が心理的幸福感の向上に役立つことと、②対面で効果が見られなかった理由として、Twitter と対面を比較する点から、対面からオンラインにシフトするというデジタルネイティブ時代の新しいコミュニケーションスタイルと言える。しかし、一般的信頼性の低い人は Twitter を多用しても社会的ネットワークを広げることはなく、親しくない他者からのサポートに対して排他的になるため、心理的幸福感に繋がらなかった。

（指導教員 叶 少瑜）